＜＜東北魂＞＞を鼓舞する
電子新聞

発行所　株式会社遊無有
〒 207-0015
東京都東大和市中央 1-539-15
http://www.yumuyu.com/
e-mail:y.s.yumuyu@ozzio.jp

東北再興

Re-Create, TOHOKU!

無料　第137号　毎月発行

発行 2023 年（令和 5 年）10 月 16 日　月曜日

2023年（令和5年）10月16日　月曜日

【当新聞発行責任者兼編集長兼記者紹介】

【砂越　豊】

宮城県生まれ、70 歳の新人歴史映像作家兼プロデューサー。3 作目の「古代製鉄の埋もれた歴史を発掘した映像」の【奪われた古代鉄王国】の大崎上映会は延期。とはいえ新型コロナ禍を乗り越えて４作目制作に向けて奮闘中。趣味は古代史・縄文文化研究。埋もれた歴史を発掘することと東北から日本を変えることを標榜。

㊗ 大谷翔平選手―日本人初ホームラン王

次々に記録を樹立するだけが彼の魅力ではなく、知らぬ間に「自分も何かやれる」と思わせてくれるのが彼の魅力だ！

チームMVP の表彰（10 月1 日）・・NHK　NEWSWEB より

大谷選手が大リーグ初の日本人ホームラン王に

すでに周知のように、大リーグのエンジェルス所属、東北・岩手県・奥州市出身の大谷翔平選手が今シーズン、ホームラン四十四本でアメリカンリーグのホームラン王のタイトルを獲得した。

日本人選手が大リーグでホームラン王を獲得するのは初めてで、アジア出身の選手としても大リーグ史上初の快挙ということで、まずはまことにめでたい。

このタイトルは、いままで大リーグに挑戦した日本人では誰もなしえなかったし、第一、居並ぶ大リーグのスラッガーたちを飛び越えてホームラン王になるなど、当の日本人選手たちもファンでさえも想像することさえしなかったことである。

そのため、大谷選手がシーズン終盤で、右ひじのじん帯損傷や脇腹のけがのため、シーズンの最大の山場の九月三日以降、試合に出場できなくなって、タイトルが逃げていくのではないかとドキドキしながら心配していたが、ほんとによかったと思う。

東北人の一人として、また東北の再興を標榜する当新聞としても、まことに誇らしい出来事であった。

今シーズンの成績

大谷選手の今シーズンの成績はホームラン王のみでなく、「魔球」のような球種で相手打者をきりきり舞いさせた投手部門の成績も、打撃面でも、その長打率も、出塁率もすごかったし、たくさんの盗塁もした。

「二刀流」どころか、「投げて」、「打って」、「走って」の三拍子の大活躍だった。

そこに加えて、とにかく、今シーズンは大谷選手の記録ラッシュのシーズンであり、あまりに記録が多すぎて、驚くいとまもなくなってはいたが、これらの成績はきっと、長い時間が経ってから初めてその評価も決まるような次元の成績なのであろうと思う。

ただし、このさき心配なのは、二度目のＭＶＰ受賞となるかどうかであり、さらには、来シーズンへ向けてのチーム移籍問題がどう決着するかや、「二刀流」がいつから再開できるかなどがあり、どれも非常に心配である。

とにかく、大谷選手の動向が気になって仕方がない。

大谷選手の魅力は「記録」ではない

しかし、大谷選手の最大の魅力は、こうした野球の記録ではないような気がしている。

もちろん記録も大事だし、すごく気になるが、それ以上の何かが大谷選手にはあるように思えてならない。

ではその魅力の核心とは何だろうか？

筆者は、大谷選手のプレーを見ていると、「自分にも何かやれるという自信」を与えてくれることではないかと思うのである。

大谷選手が出場する試合では誰もが、彼が新しい何かをしでかすかもしれないとワクワクして試合を見ているのだ。

「自分にできる何か」とはもちろん、野球に限ったことではない。それぞれの人たちが置かれている状況のなかでやれること、である。

大谷選手が大リーグに移籍した当初は、「二刀流」など無理だ、出来る訳がないという評価が大半だった。

しかし、彼はみごとにやり遂げた。しかも、大記録のおまけつきである。

こうしたことを次々にやり遂げてきたのが大谷選手でもある。

自分から進んで「限界」を設定して、そのなかで活動するのは大谷選手にはまったく似つかわしくない。

常に「限界」に挑戦し、記録樹立ということで、「限界」を破壊して、次なるステージにチャレンジしていく。

そんな生き方モデルを自ら率先して実行し、ファンに示しているような気がするのだ。

東北も「限界」に挑戦せよ

大谷選手が東北の岩手県奥州市出身だからというわけではないが、同じ東北出身の大谷選手の活躍から東北が学ぶことがあるのではないだろうかと考えてみる。

筆者は東北出身であるが、あえて、「東北」で嫌いなところを挙げてみる。

それは、長年の、中央からの「いじめ」により、ひがんで、拗ねて、いつもあきらめるような姿勢である。

その姿勢が、強固な「東北の限界」を自ら設定してしまっているのではないかとも考えてしまうのである。この沁みついたマイナス思考を排除して、大谷選手のように、あくなきチャレンジ精神を身に着けるべきだと思う。そして大谷選手に続くべきだと思うのだ。

そうすることで、「東北の限界」に挑戦し、その限界を打ち破っていき、「東北の再興」を目指していこうではないか。

大谷 MLB今期の成績・・NHK NEWSWEBより

【投手成績】

▽先発 23試合 10勝5敗（勝利数リーグ24位）
▽投球回 132回（※規定投球回数の162には届かず）
▽防御率 3.14
▽被打率 .184
▽奪三振 167（リーグ20位）
▽奪三振率 11.39（※9イニングあたりの奪三振数）

【打者成績】

▽主に指名打者として135試合（※規定打席に到達）
▽ホームラン 44本（リーグ1位）
▽打率 .304（リーグ4位）
▽打点95（リーグ14位）
▽盗塁20（リーグ20位）
▽安打数 151本（リーグ22位）
▽四球 91（リーグ5位）
▽出塁率 .412（リーグ1位）
▽長打率 .654（リーグ1位）
▽OPS 1.066（両リーグ通じて1位）
（※OPS＝出塁率＋長打率）

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

新シリーズ【東北の“食”を掘り起こす】③…『東北の米産業大変革』

東北の米産業はいまのままでほんとうにいいのか？大変革が必要ではないのか？

再び東北米産業を取り上げる理由

当新聞で「米」や「米粉」を何度か取り上げてきたが、それらの記事を読み返すと、十分に掘り下げた感じがしないのである。何か中途半端な印象が拭い去れない。

まだ、東北の米産業に潜む根本的な課題を徹底的にあぶりだし、掘り尽くしていないと反省した。

それが、再び東北の米産業を取り上げる理由であり、今回の記事を書くに至った理由であり、従来記事よりもっと深掘りしたいと思った理由である。

米粉料理も有効だが・・・

とはいえ、「米粉料理」のレシピを増やし、米消費のスタイルに変化をつけていくことは、硬直化している東北の米産業にとってけっして悪いことではないと考えている。

むしろ、ある意味で良い効果を産み、東北の米産業を活性化していくことはまちがいないだろう。

しかし、それだけでは足りない。東北米産業が大きく動くまでには至らないと考える。

多くの犠牲を払ってきた東北米産業

東北の米産業は、少なくとも江戸時代から数百年という時間と、多くの犠牲を払ってようやくここまでたどり着いた歴史がある。

米は南の作物であり、もともと東北の気候には合わない作物である。

それを時の中央政府が強制的に作らせてきた経緯がある。

そのため、特に岩手を中心にして、冷害による凶作に何度も苦しんできた。飢餓も何度も発生した。一揆も数多く発生して、多くの犠牲者を産んできた歴史がある。

そうした東北米産業は、苦労を積み重ねて、戦後になってようやく初めて「供給」が「需要」に追いついたのである。

そこでやっと東北米産業は成功するかに見えた途端に、パン食用小麦粉などに押され、米消費が急激に減り、「コメ余り事態」を迎えてしまった。

そして、水田での耕作を放棄する「減反政策」となった歴史がある。

したがって、東北にとって「米」は憎き敵のような作物でもあるのだ。何度も苦しめられ、裏切られた作物である。

しかし、一部に休耕田を抱えてはいるが、一面の水田だらけになった東北の景色を短期間で元に戻すのはほぼ不可能である。

「出口」はないのか？

こうした状況に追い込まれている東北米産業であるが、もう長期に亘って撤退していくしかないのだろうか？他に方法はないのか？全面撤退などと理屈では言えても、現実的にそうすることなど無理である。

ここまでに、何世紀にもわたる膨大な投資があり、元に戻すにも膨大な投資が必要である。

進むに進めず、退くに退けないのだ。

だから、撤退するなどはもってのほか。何が何でもやり続けなければならないのは当然の結論である。

そこに、米粉料理を若干取り込むだけで、少し矛先を変えるだけで、東北が米産業に投入してきた労苦は引き合うものだろうかと考えてしまうのだ。

もっと東北の米産業を根本から変革していくようなウェーブがないと、ここまでの労苦とはバランスが取れないのではないだろうかと心から思うのだ。

米先進国のベトナムに学ぶのはどうか

先日、何気なくテレビを見ていたら、いまから二十年以上前に制作されたベトナムの食紀行番組が目に留まり、見入ってしまった。

二〇〇一年、ＮＨＫ制作の『味覚の迷宮ベトナム　二つの大河　食の大紀行』という番組だった。

そのなかで、ベトナム各地の米料理が、これでもかというほど次々にたくさん登場する。

その多彩さに目を奪われた。今から二十年以上前の光景だから、ベトナムの状況も変化しているかもしれないが、この米消費の多様性を、東北の米産業が学べないものかと考えた次第である。

米粉料理だけでもとても数えきれないほどであった。料理方法も数えきれない。

米で作られた麺も多様である。日本でも知られるようになった「フォー」だけではない。たくさんの米麺料理がある。発酵して少し酸っぱい米麺もある。地方色も多様である。

ご飯料理も多様である。

使われる米の種類も多様である。白だけではない。

赤米もある。形状も、価格もさまざまであり、何十種類もある。それらをベトナムの人々は使い分けている。

さすがに米料理先進国のベトナムである。

それに比して、日本の米料理はどうだろう？

いまだに、御飯用茶碗に白米のイメージが主流を占めている。

いつまでもこのイメージにしばりつけられていては、東北米産業の行く末はずっと先まで暗いままだ。

もっと多様な米の活用こそ、東北米産業が生き延びていく道であり、すぐにもそれを実践しなければならないとテレビ番組を見ながら強く思った次第である。

ベトナムの米料理人を招へいしてはどうか

もしそれが良いアイディアだと理解してもらい、これから「関係機関」と歩調を合わせて、徐々にベトナムの米料理を研究していこうなどと悠長なことを考えてはいつまで経っても東北の米産業は変化しないだろう。

激動の時代にはその環境に即した迅速な対応が求められる。

ということで、いっそのこと、ベトナムの米専門の料理人を何人か呼んで、ベトナムのあらゆる米料理をすべて日本で作ってもらい、それをなるべく多くの潜在的米料理消費者の方々に味見をしてもらうのはどうだろうか？

その数ある米料理のなかから、日本に合った料理を選定していくのである。

その次は、日本の米料理人がレシピを競うイベントを数多く企画して実施するのである。

こうしたイベントを国中のあちこちで開催する。

ベトナムの米料理をそっくりマネするなど、ただの人まねではないかとの批判も十分覚悟しての対応案である。

もし成功したら、東北米産業の景色は一変する。

休耕田も再び元に戻る。多くの米料理に関係する起業家が出現する。既存の食品関係企業も、新たな米産業に進出する。

東北の米産業は一変する。大産業に成長する。

東北は米産業の中心地だと大威張りできる。

だから、米の生産の前に、消費構造を一変し、増大させることが必要なのだ。

東北にとっての「敵」が強力な味方に

そうなって欲しいと切に願う。

東北にとっての長年の「敵」が強力な味方になって欲しいと願う。

そうなれば、日本の米どころの東北が大いに活性するだろう。

さらに東北再興の道も拓けるというものである。

何世紀にもわたって苦労してきた東北の米関係者に報いることができるというものではないか？

ベトナムの伝統料理「バインチュン」と「バインザイ」・・・ICONIC GROUP より

米粉の麺が軽やかなハノイの定番 " 豚つくねつけ麺 "・・・四季 dancyu より

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

新シリーズ【東北を再発見する旅】…④　震災後の宮城・牡鹿半島

『大災害と市町村合併による弊害で二重三重に苦しんだエリア』

宮城県石巻市は東日本大震災の６年前に
１市６町の合併で面積は５倍に！・・・
『なんでも宮城』より

宮城県石巻市牡鹿半島への取材関連記事

この記事は、いまでもけっして忘れることができない当新聞の取材に関連するものである。

とはいえ、この連載シリーズである「東北を再発見する旅」という範ちゅうからは少し外れているかもしれない。

しかし、先月からシリーズの今回号を考え始めたとき、なぜか、どうしてもこの記事をシリーズ記事として書かずにはいられない気持ちになったのだ。

その取材は、東日本大震災から少し経ってからの宮城県石巻市の牡鹿半島部への取材であった。

あの大震災からすでに十二年以上経過した。

そんな今だからこそ、あの取材を冷静に振り返ることができると考え、思い切って取り上げてみることにした。

大合併したばかりの宮城県石巻市に大災害

東日本大震災で最大の犠牲者を出したのは、宮城県石巻市だった。死者・行方不明者の数が三千八百十九人にものぼった（二〇一二年）。

実は、この石巻市は、大震災の六年前の二〇〇五年（平成十七年）の広域合併により、市域はそれまでの北上川下流域から、隣接する内陸部の町々、女川町を除く三陸海岸南端、牡鹿半島まで一挙に広がった。

この合併により、市の面積は約五百五十五平方キロメートルとなり、東京23区の三分の二ほどの広さになった。実に合併前の面積の五倍という広大な面積を有する市になったのである。

合併の目的は、当時政府が積極的に推進していた市町村大合併方針に沿って、スケールメリットを生かした自治体の財政運営を目指すことにあったが、ある意味では自治体のリストラと言えなくもなかった。

この合併で面積は合併前の五倍になったにもかかわらず、当時約二千人だった市の職員は、四百人ほど減って千六百人ほどになっていたという。

まことに不幸にも、こうした状況下で、あの大災害に遭遇してしまったのだ。

合併ほやほやの市政を大震災が直撃

合併した石巻市の中心部は密集した市街地であり、合併前においても、仙台市に次ぐ宮城県の第二の人口を誇る市であった。

その人口密集地に大地震による巨大津波が直撃し、たくさんの犠牲者を出し、家屋もあらゆる建造物も、道路等のインフラも壊滅的な大打撃を被ったことで、まちは破壊され、結果として、市政も大混乱に陥った。

生存者のための当面の緊急食料や水の確保、緊急避難場所の確保、衣類その他の支援物資の調達と配給、行方不明者捜索、当面の身の回りの生存環境の復旧などの課題が山積していた。

石巻市の市街地の課題だけでも解決していくのは大変だった。そしてそれだけで精一杯であったであろう。したがって、合併したばかりの石巻市の市街地エリア以外の地域のことを同時並行的に考える余裕はなかったにちがいない。

他方、新たに合併に加わった形の周辺の町々では、リーダー的役割を担ってきた地域のリーダーである議員も、かつての町役場の職員たちも、大合併で減少していた。

まさに地域のリーダー不足であり、かつ、市の職員が減少している状況となっていたのだ。

したがって、市街地と同様に、緊急食料や水の確保、緊急避難場所の確保、衣類その他の支援物資の調達と配給、行方不明者捜索、当面の身の回りの生存環境の復旧などの課題に見舞われていたにもかかわらず、対応は市街地に比べて、後手後手となった。

それらの町の旧町政は「大石巻市」の管理下に組み込まれることにはなったが、大合併からわずか六年で、新しい市政機構が隅々にいたるまで完璧に構築されるはずもない。脆弱な機構が少しずつ整備されつつある状況であったろうが、機能不全は否めなかった。

まことに不幸なことに、そんな新市政機構の構築途上の「大石巻市」に大震災が襲ったのである。

特に、大津波が直撃した太平洋沿岸部、牡鹿半島部も多くの犠牲者を出して、インフラも大打撃、支援物資も、市の中枢の市街地の大混乱で遅れた状況だった。

また、市街地にある、市政の司令塔本部に連絡して、指示を得ようとしても、通信インフラも道路も寸断されていた。

それらのエリアは「孤立」を余儀なくされていたはずである。

なぜそこへ行ったのか

石巻市の市街地の悲惨な震災後の状況はたびたびマスメディアにも登場した。

「炊き出し」場面などで多くのタレントも現地に赴いていた。それを追い掛け取材するマスメディアを引き連れて。

その一方で、太平洋沿岸部の被災地はめったに登場

大震災１年７ケ月後の牡鹿半島鮎川ー被災した集合住宅放置

大震災１年７ケ月後の牡鹿半島鮎川ー被災した建物放置

大震災１年７ケ月後の牡鹿半島小渕ー 1m ほど地盤沈下した岸壁

大震災１年７ケ月後の牡鹿半島折の浜ー津波で流された巨大コンテナ放置

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

しなかった。

マスメディア取材班もその現場には行くことがむずかしかったこともあったであろうし、沿岸部には人口ももともと少ないし、マスメディア受けする光景も、震災直後の状況以外はなかったから、メディアに登場しなかったのかもしれない。

そのため、牡鹿半島部の詳しい状況はよく分からなかった。

それならばということで、メディアの端くれである当新聞もそこに行かねばならないし、つぶさに状況を見なければならないと思って、現地に赴くことにした。

筆者は宮城県出身者ということもあり、わずかではあるが、牡鹿半島部のことを知っていたので、大震災直後ではなかったが、少し経ってから、車で牡鹿半島の先端まで行ってみた。

二度の取材で判明した半島部の復旧大幅遅延

震災直後の石巻市市街地の様子は、現地に暮らす筆者の友人で被災者でもあった友人による写真でおおよその状況は把握していた。

大津波で打ち上げられた船が道路上にあったし、モーターボートと車が折り重なるようにして、建物に突き刺さった光景もあった。すさまじい光景だった。

大震災から一年三か月後に筆者は、石巻市街地とその周辺を取材した。

市街地は津波跡の痕跡が残る場所もあちこちに残ってはいたが、それでもまち全体とすると徐々にではあるが、当面の復旧が進んでいたと言えた。

石巻市の牡鹿半島部へ取材に行ったのは、大震災後一年七か月後であった。

その際には、市街地の復旧状況も見ていたので、結果的に牡鹿半島部の復旧状況と比較することになった。

そこで市街地とは比較にならないほど、復旧が遅れていた現実を目の当たりにすることとなった。

大震災 1 年 3 ケ月後—市街地から石巻漁港へ向かう途中の垂れ幕

大震災 1 年 3 ケ月後—市街地のがれきの山

牡鹿半島部の二重三重の被災

まず、同じ石巻市というのに、市街地と牡鹿半島部のあまりの「復旧格差」にがく然とした。

大津波で破壊された建物は放置されたままだったし、地震で一メートルほど地盤沈下した岸壁は土嚢を積んだだけで、満潮時にあふれた海水で水浸しだった。

震災発生から、取材したときまでに経過した一年七か月という期間中、牡鹿半島部の復旧はほとんど進んでいなかったのだ。

現地の被災者の方々はどんな思いで過ごしていたのだろうと考えると、いたたまれなかった。

被災したショックに加えて、同じ市でありながら、市街地からの「孤立」を余儀なくされ、国中から忘れられ、復旧も進まない現状を毎日突き付けられていたのだ。

きっと、合併などしない方がましだったと思ったにちがいない。合併しなければ「孤立感」や「疎外感」はもっと小さかったと。

牡鹿半島部取材で出会った人はいなかった。みな家にいたか、海の仕事に出かけていたのかもしれない。

でも、もし会えたとして、どんな言葉をかけることが出来ただろうか。思いつく言葉もなかっただろう。無言で立ち尽くすしかなかったであろう。

いまになってあらためて思うのは、大自然の驚異からの大災害部分に加え、大合併による大きすぎる人災で、牡鹿半島部は、二重三重に被災していたということである。

当時の取材写真を見ながら、報道もされなかったそうした事実を今更ながら思うのである。

大震災 1 年 3 ケ月後—市街地東端の未修理の橋

大震災 1 年 3 ケ月後—市街地の臨時の銭湯

大震災直後の市街地ー船が道路上に

大震災直後の市街地ーモーターボートが建物に突き刺さっている

大震災直後の沿岸部

大震災直後の市街地ー支援物資配給風景

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

今さらながら遠野の熱い二日間「遠野まつり」について

いざ「遠野まつり」へ

本紙にずっと目を通している方はよくご存じだろうが、私と同じく本紙に連載している奥羽越現像氏、通称げんさんは、東北のディープなところまで驚くほど広範な知識を有している。そのげんさんが毎年欠かさずに足を運んでいるのが、毎年九月中旬の二日間、岩手県遠野市で開催される「日本のふるさと遠野まつり」(以下、「遠野まつり」と略す)である。

そのすごさ、素晴らしさについては、げんさんが本紙でも伝えているし、たまにげんさんと時には本紙編集長である砂越さんにも参加してもらって開催している「とにかく東北を語る会」(TTKK)の場などで、これまで何度もげんさんから教えてもらっていた。一度も足を運んだことのなかった私としてもそれならば一度行ってみねばと思っていて、毎年開催日をチェックしていたのだが、これまで仕事や他の用事などとバッティングしてしまい、一度も行けずにいた。

今年の開催日は九月一六日と一七日、一六日ならば行ける！ということで、遅ればせながらようやく足を運ぶことができたのである。仙台からはJR東北本線で北上して花巻まで行き、花巻からJR釜石線に乗って遠野に行ける。

祭りの開始は一〇時三〇分とのことだったが、六時ちょうど発の東北本線の下り列車に乗れば、遠野に一〇時五分に着けるので時間に余裕を持って祭りの開始を迎えることができた。

そもそも「遠野まつり」とは

「遠野まつり」を隅々まで熟知しているげんさんを差し置いて私がこの「遠野まつり」を語ることなど甚だおこがましいのだが、とりあえず私が調べた範囲の情報をまとめてみる。そもそも遠野郷八幡宮で毎年秋に例大祭という大きな祭典が行われていた。一九七二年にその例大祭の時期に「遠野の良さを地元市民はもちろん、全国の人たちに知ってもらおう」と、遠野に多数存在する様々な郷土芸能が演じられる「岩手のふるさとまつり」として初開催されたのがこの「遠野まつり」の始まりである。翌年に「日本のふるさと遠野まつり」と名を変え、以来ずっとこの名で開催されてきている。

祭りの内容は多岐に亘り、遠野市街地では郷土芸能パレード、しし踊り大群舞、郷土芸能共演会、神楽共演会、遠野郷八幡宮では遠野南部流流鏑馬、馬場巡り、神楽共演会がそれぞれ行われ、これらの会場を縫うように遠野郷八幡宮の御神輿が市街地のあちこちを渡御する。

一口に「郷土芸能」と言っても、遠野の郷土芸能は実にバラエティー豊かで、大きくしし踊り、神楽、南部ばやし、さんさ踊り、田植踊り、神輿と分かれており、それぞれ地域の団体がそれらを守り継いでいるが、それらを合わせると何と六〇を超えるという。

「遠野まつり」当日の模様(その一)

当日、「メイン会場」とも言える駅前通りはすべて車両通行止めとなり、まずは開会セレモニーである。遠野市長はもちろん、岩手県知事、友好都市の愛知県大府市長、友好関係を結んでいるインドネシアのプルバリンカ市長らが参加して華やかに行われた。その後、猿田彦を先頭に、知事、市長らや出演団体の行列が開会セレモニー会場から遠野駅に向かって歩き出し、祭りが開幕した。

その次は同じ駅前通りで郷土芸能パレードである。先に挙げた郷土芸能のカテゴリー毎に、一日市通りとの交差点から遠野駅前まで自らの舞や踊りを披露しながらパレード行進する。驚いたのは、その多彩さである。同じカテゴリーに属する郷土芸能であっても、一つとして同じようなものがない。その多様性には圧倒される思いであった。

遠野市長の挨拶の中にあったのだが、この二日間で五八の郷土芸能団体のおよそ七三〇〇人が参加するという。現在の人口が二五〇〇〇人ほどの遠野で、この祭りに参加する人の数の多さも際立っている。市民の三、四人に一人が郷土芸能の担い手として祭りに参加してるということである。「遠野まつり」は「市民」という漠然とした主体ではなく、まさに自分たちの祭りなのだと実感した。私の住む仙台は人口で言えば遠野の四〇倍以上であるが、これほど多くの郷土芸能はないはずである。遠野の文化的な豊かさにも思い至った。

遠野の凄さを目の当たりにしながら、お昼に遠野で行きつけの「遠野醸造タップルーム」にも行った。遠野と言えば、ビール好きにとっては日本最大のホップの産地であるが、ここではそのホップを使った造りたてのビールが飲める。そのようなビールが美味しいのはもちろん、それ以外にもスペインから取り寄せて遠野で栽培している作物パドロン、さらに山口農園の肉厚で苦みが全くないピーマンと太くて旨みたっぷりのアスパラなども大変美味で、遠野は食材的にも豊かであることを改めて実感した。そしてまた、そのピーマンとアスパラを作った人がさっきパレードで踊ってたなどと聞き、いったい遠野は一人何役なのか！とまた驚かされた。

「遠野まつり」当日の模様(その二)

この日は遠野の市街地からちょっと離れたところにある「道の駅 遠野風の丘」でも「ホップフェスタ二〇二三」というビールイベントも開催中であったので、一旦「遠野まつり」を抜け出してそちらにも行ってみた。私にとっては顔なじみの岩手県内のクラフトビール醸造所のうち、「遠野麦酒ズモナ」、「三陸ビール」、「陸前高田マイクロブルワリー」の三社のビールが樽生で飲めて、ジンギスカンの串焼きや漁師の魚介焼きなど、フードも充実していた。そう、遠野は岩手の内陸部と三陸沿岸地域とを結ぶ交通の要衝でもあり、地元のみならず各地の産物が入手できる土地でもあったということを思い出した。

「道の駅 遠野風の丘」から再び遠野の祭り会場に戻ったら、件のげんさんにもバッタリ会えた。この辺りも、祭りで大いに盛り上がってはいるもののちゃんと一人ひとりの顔が見えるような雰囲気の「遠野まつり」の良さであると思った。他にも私のビール仲間も見つけてくれて声を掛けてもらった。

夕方前のしし踊り大群舞と、夕方からの郷土芸能共演会、神楽共演会はげんさんと見物した。午前中のパレードと違い、同時多発的に演舞が行われるので、目移りしてどれを見たらいいのか戸惑うようなところだが、そこは「遠野まつり」を熟知しているげんさんがしっかりナビゲートしてくれてオススメの団体のところに連れていってくれて助かった。感謝である。

実際に見て実感したが、そのげんさんがかねがね強調していた通り、この「遠野まつり」、確かに夜こそが本領発揮な感じであった。暗くなって街の灯りの下で各団体が演舞を披露する郷土芸能共演会は、昼間とは違う迫力があり、実にいい風情であった。仙台まで帰る関係で、その途中でサヨナラしなければならないのは名残惜しかったが、次に来る時は宿泊して2日間とも楽しみたい、つくづくそう思わせられるいい祭りであった。

ちなみに、街中の至るところに貼られていた「遠野まつり」のポスター、踊り手の写真はモデルさんにでもお願いしたのかと思っていたが、そうではなかった。「下郷さんさ踊り」の中でそのご本人が踊っているのをこの目でしかと見た。他の地域の人ではなく、紛れもなく七三〇〇人の中の郷土芸能の担い手のお一人であったわけである。

多彩な「～の里」遠野

全国に「～の里」と呼ばれる地域はあまたあるが、遠野ほどその「～」の種類の多い地域はないのではないかと思わされる。挙げてみると、「民話の里」(「遠野物語の里」とも)、「河童の里」(「妖怪の里」、「不思議の里」とも)、「馬の里」、「ビールの里」(「ホップの里」とも)などがある。

「民話の里」、「遠野物語の里」、「河童の里」、「妖怪の里」、「不思議の里」の元は言うまでもなく「遠野物語」として世に知られるようになった、遠野に伝わる多種多様な民話である。その民話の世界に触れたくて遠野を訪れる人も数多くおり、また民話の舞台となったスポットが遠野市内には今も各地に現存していて、民話の世界を体感できる。「遠野まつり」に登場するあまたの郷土芸能にも民話と深い関わりを持つものが多く存在する。

「馬の里」というのは、元々遠野は古くから「南部駒」という駿馬の産地として隆盛を極めた土地であることから来ている。現在でも農用馬や乗用馬の一大産地となっており、まさにその名も「遠野馬の里」がその拠点となっている。

そして「ホップの里」、「ビールの里」は先に書いた通り、遠野がビール造りに欠かせない作物ホップの国内最大の産地であることから付いたネーミングである。ただ、現在はそれまでの単なる「ホップの里」からアップグレードして、原料の産地というだけでなく、その原料を活かしてビール造りにまで取り組むようになり、まさに「ビールの里」となった。自前の原料を使ってビールを造れるところは、クラフトビールブームで醸造所の数が飛躍的に増えた今でも極めて少ない。そうした醸造所が遠野市内には二箇所もある。

これからは遠野のこの多様な「～の里」同士の横のつながりがより密になるとさらに相乗効果が期待できるかもしれない。今回見られなかったが「遠野まつり」の二日目に行われる遠野郷八幡宮での流鏑馬などはその好例だが、それ以外にも市内を自慢の馬が引く馬車が練り歩いたりしたら楽しいかもしれない。ビールは今回初の試みとして「道の駅 遠野風の丘」でビールイベントが開催されたが、「遠野まつり」に合わせて民話や郷土芸能と関わりを持つようなストーリーの限定ビールなどが出たりするとビール好きとしては楽しみが増える。

などということをあれこれ妄想できるのも、遠野が極めて豊かな風土と文化を持った地域であることが大きい。何度訪れてもその度にいろいろな楽しみ方があり、いろいろな発見がある、それが遠野の魅力である。私もきっとまた、来年の「遠野まつり」を待たずして遠野を訪れていることと思う。

執筆者紹介

大友浩平
(おおともこうへい)
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
http://blog.livedoor.jp/anagma5/

Facebook
https://www.facebook.com/kouhei.ootomo

【東北復興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

大都市を越えた進歩・発展？ 多極集中世界・東北の事

今年七月、盛夏を迎えた岩手県の一角にてある面白い、ファンタスティックとも言える出来事があった。大船渡市の三陸鉄道車両において盛大な音楽セッションが行われたのである。

それはダイナミックな景観で知られる三陸海岸沿いを走る鉄道の名物で一個車両のお座敷列車である「北三陸号」を舞台に、約二時間の貸し切りで大船渡の盛（さかり）駅⇔釜石駅間の走行中に行われた。音楽というのは、筆者も長年多少なりとも関わってきたアイルランド他ケルト文化圏の伝統音楽で古くからの仲間らが企画・実現した催しであった。よく知られるように、東日本大震災の苦難を乗り越えてかのテレビドラマ『あまちゃん』で一躍有名となり、全国から鉄道旅を楽しむ人々を集める大人気のローカル線となった本路線であるが、森と海岸を駆け抜けながら、またドラマやコミックの舞台となった名所に触れながら愛好して止まぬ音楽を仲間らと奏で過ごす時間はまさに極上と言って良いものであった。

おそらく全国的に見ても珍しい催しであったに違いないが、にもかかわらず残念ながら全く地元のニュースにすら報道されず、音楽業界のトピックにもならずほとんど世には知られぬままである。というのも、以前も書いたように基本マイナーな音楽ジャンルである上に、今回は飽くまで演奏者ほか古くからの仲間内でのイベントであり、外から客を呼び込んでのオープンなものではないなどの事情で、仕方のない事でもあった。しかしこれは画期的な事であり、何か凄い事のほんの序章に過ぎないとさえ私は感じていたのである。

今回の催しは私たち古くからのメンバーよりは、まだ二十・三十代の若い世代たちが中心になって企画・実現させた事で、もともとは中国・四国地方で行われたという鉄道列車内を利用しての音楽イベントを知った事で、東北でも俺たちの音楽でやりたいねと長年構想を温めつつ地方での活動を続けているうちに思いがけず実現の流れを掴んだという経緯であったようだ。

私個人としては以前、海外での地下鉄内でのケルト音楽セッション場面をネット上の動画で観た事があり同じような事ができればいいなと夢想していたのだがつまり私たち世代が中心であった時代は、基本的に仙台市内での活動しか発想できていなかった訳である。

ところが新世代はむしろ大都市を飛び出して、東北一円を自由な表現の舞台として縦横無尽に駆け巡り始めていたのだった。

無論、演奏者たちの大半は仙台や東京など都市部の在住だが、普段の音楽活動の舞台もまた既に仙台市内に止まらず、青森県弘前市にまで広がっているのである。弘前市に近年新しく開店したというアイリッシュ・パブに足を運ぶと今や仙台にも存在しないような広く本格的な店舗であり料理も現地アイルランド仕込みの高水準のものであった。

※

私は、奇妙な感覚に襲われていた。同じケルト音楽セッションの界隈でも、東京方面ではまさに東京近郊に多数の店舗が集中し、演奏者たちは各所を移動しながら夜な夜な腕を磨き合っている—東京一極集中の恩恵を、彼らが今も一手に受け続けている事は間違いないだろう。しかし、ここ東北では全く別の事が起こっているように見える。大都市・仙台は相変わらずの発展振りを見せるようで、増え続けるのはマンションや酒類を提供する店を中心とした消費の現場ばかりのようでもある。一方で長期の空きテナントや更地も少なくなく、大書店を始めとする文化発信の場が失われつつある危機感も、見栄え良い繁栄の謳歌の声に紛れていくようである。東北の大都市は、もう来るところまで来た—つまり限界なのではないか。東北における真の意味での「進歩」はむしろ都市を越えたところで為されていくのではないか。そんな風に感じるのは、大都市である仙台では却って新たな文化的アクションが起こらずむしろ周辺東北他県で意外な動きが多々認められる現状があるからだ。

仙台の、発展の陰で力が弱まっていると感じるこの矛盾はおそらく尚も大規模になりつつある消費活動、その経済の大部分が依然本店のある中央に向かうものであるという現実から来るものなのかも知れない。

だが逆に考えれば、仙台が極端に力を持たない（吸引力を持たない）が故に、周辺他県の活動が例え小さなものでも注目を集めやすい、という事もできよう。

それは現代の東京にも少なからず言える事かも知れない。東京の優位性や魅力は決して減退はしていないとしても、例えばフジテレビの衰退・迷走に象徴されるかのように、かつて程の発信力を保っているとは言い難いと思わざるを得ないところもある。テレビに代わって多くの人々が日々気軽に視聴するインターネット上の配信動画では、面白い魅力的な作品の配信者に驚くほど地方在住者が多い事に気づかされる。無論、人口で言えば首都圏が圧倒的であるから比率的には配信者は多いはずだが、素材の豊富さや意外性、希少性などは地方に分があると見ても間違いではあるまい。

テレビ文化が推進してきた東京一極的世界が崩壊して、長い年月隠れていた地方の財産が輝き始めた—本当は全国的になろうとしているその流れが、東北では別の形で展開しつつあるのかも知れない。

何故、東北では大都市を飛び越えようとする動きが起こるのか—それは、前述の私が妄想した、地下鉄内での音楽セッションに象徴されるように、大都市では実際には極めて実現の困難な企画が、冒頭の三陸鉄道セッションのように「非大都市」では実現可能性が高まるという事、そして仙台のような大都市では感知しにくい将来的な「危機感」をより強く察知し、対応できるという事にあるのではないか、と考える。

仙台に希薄と感じる文化面での危機感—特に全国的にも、あからさまと思われるのが書店業界の危機であるが、巨大都市・東京においても次々に大書店が閉業あるいは縮小してゆくような状況下、かの魅力溢れる本屋『さわや書店』を擁する盛岡市とはまた別に、実に大胆な「改革運動」に乗り出した都市がある—青森県八戸市が、そこである。

数年前ほとんど初めてきちんと歩いた八戸の街でまだ真新しい書店を見つけた『八戸ブックセンター』といい、決して大きな店構えではないがガラス張りの店内は本棚が余裕をもって機能的に配置され、選書もその見せ方も考え尽くされ工夫を凝らしたものである事がわかる。店内には広いカフェカウンターがありまたアート作品の展示室、そして読書会などの催し用の小部屋、そればかりか本棚の間にハンモックが吊られて読むスペースとなっていて更には執筆者の為の「カンヅメスペース」なる個室もあるという、東京でもちょっと見たことのない構造である。只ならぬ趣を感じて調べてみると、何と八戸市が運営している書店なのだという。

八戸といえば私も思い浮かべる、仙台にも何店舗か小さな書店や雑貨店を展開する「金入（カネイリ）」を始め八戸に本社のある三つの書店が有限責任事業組合（ＬＬＰ）を結成し、市が当組合に業務委託する、という形という—思いの外、その経営方法は練りに練られた、複雑なものであるようだ。

もともとは二〇一三年の市長選での現市長の選挙公約に「本のまち八戸の拠点施設として、全く新しい書店を造る」という文言があり、その実現に際して実際には書店づくりのノウハウもアイディアもなかったという役所サイドが白羽の矢を立てたのが、「ブック・コーディネーター」として本に関する様々な活動・運営に携わる内沼晋太郎氏であった。東京・下北沢の個人書店を経営しながら私塾「これからの本屋講座」にて新規書店経営を目指す人材をサポート、更には長野県上田市を本社とする古書中心のオンライン書店を、移住者を雇用し定着させつつ展開するなど注目すべき業績を持つ異才である。

彼を始めとする気鋭のデザイナーや建築家がアートや内装を担当した八戸ブックセンターは、市の職員・書店経験を持つ移住者からなる職員・そして金入ら書店組合が雇用する販売員の三層からなる経営体制を持つ。これについて内沼氏は「行政が書店を経営するとなると必ず地元企業との競合、民業圧迫が起こる。その回避の為に地元企業との協力関係を作って共存の道を探る事が重要になる。」と語っている。

出版社から企画が持ち込まれた際、通常の書店というビジネスの場では難しいケースでも八戸ブックセンターでは文化的価値を優先して引き受ける事ができる—それが、行政が書店を経営する意義である、と言うのである。

地方故に読者が限られる事で地元書店に置かれなかったような書物も取り扱えそうする事で各々の書店の得意分野を認知してもらい住み分けも可能にする。

「本を読む人を増やす」

「本を書く人を増やす」

「本でまちを盛り上げる」の三項目を基本方針に掲げる八戸ブックセンターは今や完全に、地元の力で「自走」しており移住者からなる職員勢も八戸に骨を埋める意志を固めているとの事始めの市長選公約時点では無理矢理旗を掲げた感のあった『本のまち八戸』が今や「決して言い過ぎではない」とまで断言できるようになったと、内沼氏は語るのである。

町には本屋がこれからも必要だという声は多いが、では何故必要なのか？という問いに、氏は答える。

町作りに投資する自治体や鉄道会社のような大会社にとって重要なのはその地域の生活が豊かである事。

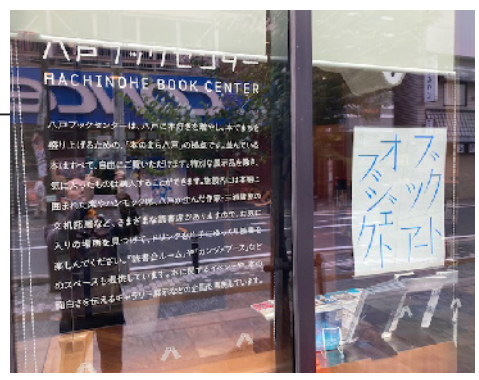
その豊かさには、人々のコミュニケーションの場、知的な刺激を受ける環境が必要となる。図書館よりも自由に変革し作り込む事ができ、新たな刺激を常に生み出す事ができるのが、本屋という場所であると。

※

内沼氏のような優れた人材を外から呼び込み、生かすのも、その地域を愛し、その文化を絶やすまいとする知的な意志である。歴史的に中央との繋がりから物質的な豊かさが約束された事で、独自の文化の破壊に長らく鈍感であった仙台にも、今や未曾有の危機を敏感に察知し、独自に小さな書店を展開し奮闘する人々が出現している。東北の本当の中心なる都市などは既になく、各々の地域が東北人を吸引し、その手元から発信させる力を内包しつつあるのかも知れない—東北という多極集中世界の行く手に、私も足跡をつけていきたいと思う。

奥羽越現像（おうえつげんぞう）氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、全国の旅の末、仙台に移住。どの本屋に入っても、とりあえず郷土本の棚に向かって立ち読みを始める東北好きである。



八戸ブックセンターにて

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

砥森神社お通り

遠野南部流鏑馬

しし踊り

シリーズ　遠野の自然

「遠野の寒露」

遠野 1000 景より

遠野は秋祭りの季節である。あちこちで祭りが催される。

それが終わると、ひたひたと迫ってくる冬の到来を身構えて待つことになる。

きびしい寒さで活動が一挙に停滞していく冬を前にするからなおさらに、祭りの情念が燃え盛り、祭りですべてのエネルギーを発散しようとするのだ。

祭りの準備期間、まちはそわそわする。子供はもちろん、大人も例外ではない。そして祭りは終わる。物憂い場面に切り替わる。

遠野はうらやましい。都市部ですっかり失われた、こうした祭りの興奮と祭りの後の弛緩がまち全体でいまも続いているからである。

山口さんさ

神楽（三番叟）

南部囃子

ムラサキシキブ

山の神舞

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

写真でお伝えする
東北の風景

「鵜住居まつり」

写真撮影
尾崎匠

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.